

4.1 スカラーの勾配

座標 x, y, z の関数 $f = f(x, y, z)$ が与えられた場合, 点 (x, y, z) における f の勾配 (gradient) は以下のように定義される.

$$\text{grad } f \equiv \frac{\partial f}{\partial x} \mathbf{e}_x + \frac{\partial f}{\partial y} \mathbf{e}_y + \frac{\partial f}{\partial z} \mathbf{e}_z. \quad (4.1)$$

ここで \mathbf{e}_i は i 方向の単位ベクトルである. grad はグラジエント, もしくはグラッドと発音する. (4.1) はハミルトンの演算子

$$\nabla \equiv \mathbf{e}_x \frac{\partial}{\partial x} + \mathbf{e}_y \frac{\partial}{\partial y} + \mathbf{e}_z \frac{\partial}{\partial z}$$

を用いると

$$\text{grad } f = \nabla f$$

と表される.

- (1) 固定点 P から一定の微小距離 dr だけ離れた点 Q がある. 点 P から Q へ移動した際の関数 f の変化が最大となるのは, ベクトル PQ が点 P における ∇f に平行な場合であることを示せ (ヒント: ベクトル PQ を $d\mathbf{r} = \mathbf{e}_x dx + \mathbf{e}_y dy + \mathbf{e}_z dz$ としてみよ).
- (2) ∇f は $f = \text{一定}$ の面 (これを等位面と呼ぶ) に垂直であることを示せ.
- (3) g を f とは異なるスカラー関数とする場合, 以下の式が成り立つことを示せ. ただし α, β はスカラーとする.

$$(i) \nabla(\alpha f + \beta g) = \alpha \nabla f + \beta \nabla g$$

$$(ii) \nabla(fg) = g \nabla f + f \nabla g$$

$$(iii) \nabla \left(\frac{g}{f} \right) = \frac{f \nabla g - g \nabla f}{f^2}$$

$$(iv) \nabla f(g) = \frac{\partial f}{\partial g} \nabla g$$

- (4) 原点 O に対する点 P の位置ベクトルを \mathbf{r} , $|\mathbf{r}| = r$ とする. このとき以下の式が成り立つことを示せ. ただし \mathbf{e}_r は \mathbf{r} 方向の単位ベクトルとする.

$$(i) \nabla r = \frac{\mathbf{r}}{r} = \mathbf{e}_r$$

$$(ii) \nabla \frac{1}{r} = -\frac{\mathbf{r}}{r^3} = -\frac{1}{r^2} \mathbf{e}_r$$

$$(iii) \nabla r^m = m r^{m-2} \mathbf{r} = m r^{m-1} \mathbf{e}_r$$

4.2 ベクトルの発散

各成分が座標の関数となっているベクトル

$$\mathbf{A} = a_x(x, y, z)\mathbf{e}_x + a_y(x, y, z)\mathbf{e}_y + a_z(x, y, z)\mathbf{e}_z$$

を考える (このとき \mathbf{A} をベクトル場と呼ぶ). \mathbf{A} の発散 (divergence, ダイバージェンス) は以下のように定義される.

$$\operatorname{div} \mathbf{A} \equiv \frac{\partial a_x}{\partial x} + \frac{\partial a_y}{\partial y} + \frac{\partial a_z}{\partial z}. \quad (4.2)$$

(1) $\varphi = \varphi(x, y, z)$ をスカラー関数とすると,

$$\operatorname{div} \cdot (\varphi \mathbf{A}) = (\operatorname{grad} \varphi) \cdot \mathbf{A} + \varphi \operatorname{div} \cdot \mathbf{A}$$

となることを示せ.

(2) スカラー関数 φ に対し,

$$\operatorname{div} (\operatorname{grad} \varphi) = \frac{\partial^2 \varphi}{\partial x^2} + \frac{\partial^2 \varphi}{\partial y^2} + \frac{\partial^2 \varphi}{\partial z^2}$$

となることを示せ.

$\operatorname{div} (\operatorname{grad} \varphi)$ は $\nabla \cdot (\nabla \varphi)$, $\nabla^2 \varphi$ 等とも表す. とくに ∇^2 を記号 Δ で表し, これをラプラス演算子と呼ぶ.

(3) 3次元空間内の定常な流れを考える. このとき空間内の各点の速度場は $\mathbf{v}(x, y, z)$ で与えられる. 流れ場中に空間内のある一点 $P(x, y, z)$ を頂点にもち, 角辺が x, y, z 軸に平行でその長さが (dx, dy, dz) である微小直方体を置く. この直方体から単位時間に流出する流体の総体積は, 近似的に

$$(\operatorname{div} \mathbf{v})_P \times dx dy dz$$

と表されることを示せ. ここで $(\operatorname{div} \mathbf{v})_P$ は点 P における \mathbf{v} の発散を表す.

4.3 ベクトルの回転

ベクトル場 A に対し, その回転 (rotation, ローテーション, ロート) は以下のように定義される.

$$\text{rot } A \equiv \left(\frac{\partial a_z}{\partial y} - \frac{\partial a_y}{\partial z} \right) \mathbf{e}_x + \left(\frac{\partial a_x}{\partial z} - \frac{\partial a_z}{\partial x} \right) \mathbf{e}_y + \left(\frac{\partial a_y}{\partial x} - \frac{\partial a_x}{\partial y} \right) \mathbf{e}_z. \quad (4.3)$$

行列式の形で書けば,

$$\text{rot } A = \begin{vmatrix} \mathbf{e}_x & \mathbf{e}_y & \mathbf{e}_z \\ \frac{\partial}{\partial x} & \frac{\partial}{\partial y} & \frac{\partial}{\partial z} \\ a_x & a_y & a_z \end{vmatrix}$$

と表される.

- (1) $\text{rot} A$ の第 i 成分をエディントンのイプシロン ε_{ijk} を用いて表せ.
- (2) スカラー関数 φ に対し $\text{rot} (\text{grad } \varphi) = 0$ となることを示せ.
- (3) $\text{div} (\text{rot } A) = 0$ となることを示せ.
- (4) $\text{rot} (\varphi A) = (\text{grad } \varphi) \times A + \varphi \text{rot } A$ となることを示せ.
- (5) 原点を通る固定軸の周りに一定の角速度 Ω で剛体が回転しているとする. 剛体の任意の点における位置ベクトルを r とする. r における速度を v とするとき, $\text{rot } v$ を計算せよ.